

ドストエフスキーの大地と大地主義

糸川 紘一

1 [コロムナ教育大学主催・国際ロシア文学シンポジウム]

ドストエフスキー・揺籃の野辺

「都市小説」ならぬ「大地の文学」ここから

昨年（2003年）8月下旬、ロシアのコロムナ教育大学で「ロシア文学の教育思想」という国際学会が開催され、私はその主宰者で旧知のドストエフスキー学者V I・ヴィクトロヴィチ博士の招待を受けてそれに参加した。ロシアの学会に十数回も参加した経験に照らしても今大会は画期的な学会だったが、日本から私の他に参加者はなかった。

コロムナはモスクワの南160キロにあり、更に30キロ南のザライスクと共にクレムリンを擁する古都である。父親がモスクワの貧民病院の官医だったため、ドストエフスキー一家は病院の一角の官舎に暮した。やがて退官を控えた父親がザライスク郊外に領地ダロヴォエを購入すると、町の子だった未来の作家は十代の数年間、この村に夏を過ごすことになる。この村での生活は作家の文学全体に決定的な意味をもつのだが、実はそのことは余り知られていない。

「都市小説」論の限界

貴族文学の色彩が濃く、総じて地主文学の名に相応しいトルストイやツルゲーネフの文学は、当然のことながら農村を主な舞台とし、自然描写に富む。これに反して、帝政ロシアの首都ペテルブルグを自身の活動場裏としたドストエフスキーの文学は自然の存在感が極端に乏しく、大地から遮断された典型的な都市文学と見なされ易い。ドストエフスキー文学の言わば「本場」であるサンクト・ペテルブルグで最近刊行された案内書『ドストエフスキーの7つの博物館』のダロヴォエの頁には次のような記述がある。

「ドストエフスキーの散文には自然の描写が滅多に見られない。彼は、無条件に、都会派作家であった。だがごく稀れに見られる彼の風景描写には自然との深い結びつきが感じられる。孤独と絶望の苦しい時に、彼は自然と自分の深い触合いのエピソードを思い出し、それを驚くほど鮮明で情感溢れる形象に写している。」⁽¹⁾

この件は示唆的な矛盾を含んでいる。それは、先ずドストエフスキーを「無条件に」

(あるいは「疑いの余地なく」)都会派作家としている。だが続いては、反対に、事実上それを言わば「条件つきで」(あるいは「疑う余地を残して」)としている。この矛盾はどの様に解消すべきものであろうか。

日本では後藤明生が著書『ドストエフスキーのペテルブルグ』で「都市小説」という用語を定義なしに使っている。⁽²⁾ 初期と中期の小説(『貧しき人々』、『虐げられた人々』など)が殆ど「ペテルブルグ物」的であり、代表作の一つ『罪と罰』もペテルブルグを舞台とすること等から、ドストエフスキーの小説が「都市小説」であるという理解がここでも「無条件で」(あるいは「疑問の余地なく」) 恰も自明のように提示されている。

ドストエフスキーは祖国と西欧の文学遺産を貪欲に消化吸収した。一世代前のプーシキンの『スペードの女王』、ゴゴリの『ネフスキー大通り』等は紛れもない「都市小説」としての「ペテルブルグ小説」である。半世紀前に流行した流派「都市の生理学」も同様である。これらの伝統をふまえたドストエフスキーの初期作品(一部、60年代の中期作品も)は、なるほど多分に「都市小説」的ではある。

だが、それを以てドストエフスキー文学が「都市小説」であるとする見方には飛躍や矛盾がある。ロシアが「ヨーロッパの田舎」であるという言い方はロシアに対する西欧の蔑称の意味合いが強いが、それが少なからぬ客観性をもつことも否定できない。ヨーロッパの後進国としてのロシアの世界史的な位置づけはドストエフスキーやトルストイ等を輩出した19世紀においてむしろ明確さの度を強めていた。19世紀における先進諸国としての西欧と後進国としてのロシアの間には、政治的には君主制から共和制へと移行期にあった西欧に対して、ロシアでは専制政治が一貫していた。そして両者の間には西欧の都市社会とロシアの農村社会という顕著な相違点があった。では、農村社会、しかも農奴制下のロシアの農村社会で「都市文学」がどんな意味をもつのか。ドストエフスキー文学が「都市文学」だとするならば、その見解はこの問いに答えなければならない。この問いは容易な答えを拒絶する、ロシア文化史の難問の筈であり、20世紀はまだこの問いに正解を出せずに幕を降ろしたのであった。

19世紀ロシアの知識人を二分してスラヴ派と西欧派が対立した「ロシアとヨーロッパ」というテーマにおいて、ペテルブルグというロシア唯一の西欧型都市は西欧派の、そしてヨーロッパの象徴であった。そしてこの対立においてドストエフスキーは西欧派でなくてスラヴ派寄りであり、その一翼を担った「大地主義」の主唱家であった。前掲書の著者である後藤明生は巻末の対談で、この両派の永久共存こそ落とし所であるとする言わば「楕円」理論を提示しているが、これはパフチンの「多声(ポリフォニー)」理論とその本質を同じくするもので、今ではD・リハチョフ等の反論に堪えない。ドストエフスキーを「都市小説」の作家、都会派作家とする断定は疑問符なしに済まされない。

「大地の文学」ここから

今学会は二冊の論集を刊行した。一冊の題名は学会名と同じであり、もう一冊『ドストエフスキーの教育学』にはV・ミフニケヴィチの「幼年時代の福音書…」が掲載されているが、この題目は生涯を一貫するドストエフスキー文学の一光源を言い得て妙である。ここに言う「福音書」は作家が「真の家庭」の温い懷に抱かれて、父親が新たに購入したダロヴォエの野辺に遊んだ幼少期の思い出の記のことである。それは『未成年』等、後年の重要なテーマ「偶然の家庭」に繋る。

この「福音書」への言及は晩年に近づくほど頻度を増すが、注意して読めば中期・初期の作品にも見られる。例えば、青年時代にペトラシェフスキー事件に連座して逮捕され、ペテルブルグのペテロ・パウロ要塞監獄に幽閉されていた時に書いた『小さな英雄』の森の件は、作家の弟アンドレイの『回想録』に綴られたダロヴォエの記を想起させる筈である。森の件に「撒かず、刈らず」云々の本物の聖書の詩句（マタイ伝の「山上の垂訓」）が引用されているのも偶然であるまい。因みに弟アンドレイの回想録は本稿のテーマの一等資料である。ドストエフスキー自身の筆に成るダロヴォエの描写は五大長編にも様々な形で反映を見ているが、『作家の日記』（一八七六年）の短編『百姓マレイ』において極まる。そこでは自然のモチーフと民衆のモチーフが渾然として一体化している。では一体化した自然と民衆を描く、いかなる「都市小説」や「都市文学」があり得ようか。それは「大地の文学」を措いてあり得まい。

大会最終日のダロヴォエの野外学会は1冊目の論集の第3部に対応する。そこには私を含む3人の数頁ずつの報告主題が掲載されているが、その一人M・ヌージディナ女史は次のように書き始めている。

「『さて、その知人に別れを告げながら、話のついでに、自分はこの機会を利用して、少しばかり回り路ではあるけれども、モスクワから150露里わきの方へ寄った所にある、私にとって幼年・少年時代の旧蹟を訪れてみる積もり、だと言った。それはかつて私の両親の領（もの）であったが、今ではとくにうちの親戚に当たるある婦人の所有になっている村なのである。私は、40年からそこへ足踏みしなかつたので、何度いってみようと思ったか知れないけれど、いつもその志を果たさなかつた。にもか拘らず、このちっぽけな見どころもない土地は、その後一生消えないような、極めて深い強烈な印象を与えたので、そこには私にとって何より尊い追憶が満ちているのだ』

ドストエフスキーの名と作品は極めて強固にペテルブルグと結び合っているので、彼の幼少期と結びついた小さな領地と土地の追憶が彼の人生においてどのような位置を占

めたか、またそれらが彼の文学作品の中にどのような反響を見たかは、こんにち想像することが困難である。だが彼の小説の地理的条件が時折まさにダロヴォエの近辺から取られていて、『カラマーゾフの兄弟』、『スチェパンチコヴォ村とその住人』、『悪霊』ほかに私たちがその反映を見出すことは議論の余地なき事実である。次のような地名が脳裏をかすめる　ブルィコフの森、オストログの野原の中の森、ネチャーエフの墓地、ハーリンの森、ロスク...

そこで、ダロヴォエが浮上する。」⁽³⁾

この画期的なシンポジウムを実現した主宰者V I・ヴィクトローヴィチ博士の功績は大きい。ダロヴォエが言わば地元であるとはいえ、前例のない異色のテーマで大規模な大会を企画し、ロシア国内だけでなく国外の研究者を呼び寄せ、自ら2冊の論集を編集・出版した組織力、統率力はその豊かな学殖と共に非凡という言葉にふさわしい。日本との関係では、博士は2000年に数人のロシア人研究者と一緒に初めて来日して千葉大学で開催された国際ドストエフスキー学会に参加した他に、北海道新聞(1996年8月27日付)にドストエフスキーが執筆した論文6点の新発見者として紹介されている。同年11月号の雑誌『ズナーミャ』に発表されたその論文の複写を、このたび私は博士から直々に頂戴する恩恵に浴した。また博士は大会のあと年内に付帯事業と言うべき、もう1冊の論集『未成年。可能な読み方』を刊行した。たまたま『未成年』論を持ち合わせていた私がこの論集にも収録の機会を得たのは幸運だった。『未成年』はドストエフスキーの5大長編の中で、読まれることも研究されることも最も少い。近年その問題が漸く自覚され、指摘されてきたが、博士の刊行した『未成年』論集はそうした気運の高まりを一段と加速させる快挙となろう。これによっても博士の天賦の豊かな独創性を窺うことができる。論集『ドストエフスキーの教育学』の「编者より」に博士は次のように書いている。

「論集の第3部のテーマは領地ダロヴォエ(モスクワ州ザライスク地区)の歴史と現状である。ドストエフスキーの幼少期の村がある土地には今や醜い荒廃の気配が漂っている。だが多感なロシアの少年の心を形成した自然の景観は残っている…。昔の領地のいしずえと破壊し尽されはしなかった教会堂の壁、そして草地の真っ直中のひっそりした墓碑は潮時を待っている…。この土地の運命に胸を痛める人々もいる…。ロシアと世界の文化のために、複合的な研究がこの土地の意義にふさわしい保護区域を作り出すための基盤になるように、学問的な力を含む諸々の力を結集することが必要である。ここに来る人々にはドストエフスキーの人柄と作品における多くのことが、ある種の不条理な、「子供の」水準で合点が行くものになる。この土地にはおのずからなる教育学があるのだ。」⁽⁴⁾

ダロヴォエの南百数十キロには世界に名高いトルストイの旧領地ヤースナヤ・ポリャーナがある。またその百数十キロ南西にはロシア人なら大抵は知っているツルゲーネフの旧領地スパスコエ・ルトヴィノヴォがある。ロシアが誇る祖国の二人の文豪の「ふるさと」は共に国家によって整備・維持・管理されて、見事な佇いを見せている。いずれも国の自然・文化財保護区域となったそのかみの地主屋敷だが、ドストエフスキーの「文学のふるさと」ダロヴォエはまだ今後の整備を待つ現状にある。大会最終日の現地ダロヴォエでの野外集会には、その日の遠からぬことを願う百余の参加者の熱い思いが漂っていた。

注釈 *印のある番号はロシア語文献を示す。

(1) 『ドストエフスキーの7つの博物館』、サンクト・ペテルブルグ、
「青少年文学出版社『リツエイ』」、1998年。

(2) 後藤明生 『ドストエフスキーのペテルブルグ』、三省堂、
1987年。「都市のジャーナリズム」叢書。

* (3) (筆者M・ヌージディナによる冒頭の引用はドストエフスキー
『作家の日記』、1876年、7月・8月号、第1章1より。)
V1・ヴィクトローヴィチ編 『ドストエフスキーの教育学』
(論文集)、コロムナ、国立コロムナ教育大学、2003年、210頁。

* (4) 同、6頁。

2 [コロムナ教育大学主催シンポジウムでの講演(原文ロシア語)]

ドストエフスキー・大地主義の生成

大地主義はロシアの19世紀60年代の社会思潮であると言われている。だがドストエフスキーの大地主義に関する限り、それはこの10年間には到底限定できない。それは1860年代の作家兄弟の雑誌『時代』と『世紀』から70年代の『作家の日記』へ移行する。このことは、大地主義が作家の円熟期の創作活動の全体の中に息づいていたことを物語る。のみならず、大地主義の大地の語義に民衆があり(後出)、『作家の日記』の夥しい頁に瀰漫する民衆論に目を向ければ、大地主義は六十年代より七十年代の方が顕著であったとさえ言える。更に、この作家において小説と時事評論が少なからぬ場合に表裏一体を成していることは、既に初期の中編小説『白夜』と時評「ペテルブルグ年代記 詩と散文」の関係から始まっている。⁽¹⁾70年代の『作家の日記』と「作家の小説」(本稿の筆者の用語)⁽²⁾の相互補完的關係を知るためには、研究史を覗くまでもない。ここから、ドストエフスキーの世界観における大地主義の不断の発展という仮説が生まれる。

ここに、ドストエフスキーは60年代になって俄に大地主義を打出したのかという問題が生じる。ではそれ以前はどうだったのか。先行する10年、すなわちドストエフスキーが懲役と兵役で過した50年代はどうだったのか。この問いへの答えを探すには作家の作品

その時代の自身の生活を基にして書かれた作品とその資料 に当たる必要がある。

『死の家の記録』の中の何が作家の大地主義と結びついているか。それは「貴族と民衆」のテーマ、あるいは「知識層と民衆」のそれである。

「ところが、旦那衆、貴族となると、話が違ふ。貴族はどんなに公明正大で、善良で、聡明であるにもせよ、囚人一同が仲間ぜんとたいで彼を憎み、軽蔑する。それが幾年も幾年も続くのだ。彼らは貴族を理解しない、なによりもいけないのは、彼を信用しないことである。貴族は、友達でもなければ、仲間でもないのだ。よしんば何年もかかって、ようやく侮辱を受けないところまで漕ぎつけたにせよ、やはり彼は内輪の人間ではなく、永久に自分の疎隔された孤独な状態を、悩ましいまでに意識しなければならない。この疎隔は時とすると、囚人たちの側になんの悪意もなく、ただ無意識に行なわれることがある。自分たちの仲間ではないという、ただそれだけのことなのである。自分に縁のない環境に生活するほど恐ろしいことは、またとあるまい。」⁽³⁾

このテーマは貴族と民衆の「断絶」、あるいは民衆と上流階級との「分裂」に他ならず、それについて私たちは雑誌『時代』の予約購読の案内に読み、その反意語を成す語彙「結合」、「合意」、「和睦」 はそこに幾度も出ているものである。

「ピョートル大帝の改革はそれだけでなく、我々にとって余りにも高いものについて。それは我々を民衆と分離したのである。そもそもの初めから、民衆はこの改革を拒否した。改革によって民衆に残された生活様式は、民衆の精神とも、その志向とも一致せず、民衆にとっては寸法も合わず、時宜にも適せぬものであった。彼らはそれをドイツふうと呼び、大帝の継承者を外国人と呼んだ。上流階級、その指導者、代表者と、民衆との精神的乖離、ただこれだけを取ってみただけでも、その当時の新しい生活が、いかに高い値をもってあがなわれたかが分るのである。」⁽⁴⁾

シベリアはオムスクの要塞監獄で徒刑に服していた50年代の前半の4年半に亘り、ドストエフスキーは民衆出の囚人と自分の「断絶」を身に染みて体験した。そのことは『死の家の記録』からの前記引用⁽³⁾がその第二部の七「抗議」、すなわち全編の終わりに近い所の件であり、しかもそこには「それが幾年も幾年も続くのだ」という一文があることや、シベリア流刑とその前後の時期の作家の手紙などから十分に読み取れる。ではその「断絶」からの、その「分裂」からの出口は何にあったのか。それはまさにその反意語を成す語彙、すなわち「結合」、「合意」、「和睦」にであった。ここにおいて既にドストエフスキーの大地主義が現われることは明らかである。作家は既に50年代の前半、すなわち大地主義を標榜する自身と兄ミハイルの雑誌『時代』と『世紀』が世に出る10年近く前に大地主義者になっていた訳である。この10年の遡行さえも未だに本格的な指摘も考察もされていない現状は、一世紀半を越えるロシア内外のドストエフスキーの研究史がまだまだ多くの未踏の領域を擁していることを物語っていよう。その最大の原因は事実上ドストエフスキーを反体制作家としてきた20世紀の作家の祖国ロシア、すなわち社会主義革命と社会主義政権、ソ連にあることは言うまでもない。ドストエフスキー文学にとってロシアの20世紀は不毛の100年であった。それは作家の祖国ロシアにとって大いなる悲劇であった。ペレストロイカとソ連崩壊のあと、ドストエフスキー研究はその祖国で関を切ったように噴出し、10年余りを経過している。

ソ連時代に刊行されたロシア共和国の百科事典は大地主義（ポーチヴェンニーチェストヴォ）の項目を次のように説明している。

「ポーチヴェンニーチェストヴォは19世紀60年代のロシアの社会思想であり、スラヴ主義的な物の考え方に近い。ポーチヴェンニーチェストヴォの代表者（N・ストラホフ、A・グリゴリーエフ、F・ドストエフスキー他）は社会の『上流階級』と『ポーチヴァ（民衆）』の接近を呼び掛けた。ポーチヴェンニーチェストヴォの理念は雑誌『時代』（1861～1864年）と『世紀』（1864～1865年）において宣伝された。」⁽⁵⁾

「ポーチヴァ（大地）、すなわち民衆」という記述は殆どドストエフスキーの専売特許

と言える。作家の60年代の時事評論もの（雑誌『時代』、『世紀』）にはそれと本質を同じくする表現が頻出する。それは「大地と国民」、「自然的根源」、「国民的根源」、「大地的根源」などである。そしてずばり「民衆の地盤」（「ナロードナヤ・ポーチヴァ」）という言い回しがある。

「果たして我が国の否定は、単なる破壊に終わるであろうか。果たして半ば破壊された建物のあとに、何一つ建設されないだろうか、そこに残るのは空虚な廃墟ばかりだろうか。…果たして我々は、復活の希望がないまでに窒息し、気死してしまったにもせよ、まだ害われない民衆の地盤の中に、その生命は存在しているのだ…これは我々の聖なる信念なのである。」⁽⁶⁾

大地主義は言わば60年代の『作家の日記』である『時代』と『世紀』の時事評論に顕著に見られるだけでなく、その時期の「作家の小説」にも盛り込まれている。62年の短編小説「いやな話」について、100年後、ソ連時代の中期に『60年代のドストエフスキー』（第一部「大地主義」、第二部「芸術作品」という著書を出版したV・キルポーチンは「いやな話」の章で「大地」の用語に触れて次のように書いている。

「おそらく、ドストエフスキーはプラリンスキーにおいて「大地」から遊離した貴族の、地主の知識人の典型を描写する積もりだったのであろう。プラリンスキーはその経歴によれば幾つかの点でスタヴローギンやヴェルシーロフのタイプのドストエフスキーの未来の主人公を先取りしている。」⁽⁷⁾

60年代の時事評論と小説の両方の分野にドストエフスキーの大地主義は色濃く現われている。だがこれが作家の大地主義の発端であろうか。それはこの時期に生まれたのであるか。この問いに肯定的に答えることはできない。少なくとも、その発端・誕生は10年に亘る作家のシベリア流刑時代に溯る。『死の家の記録』の最大のテーマの一つは60年代の大地主義に直結する民衆論（貴族と民衆）である。そしてこの作品は50年代における作家の懲役の生活の所産である。作家にとって「記録」こそ60年代の営為であったが、「死の家」の体験そのものは50年代の前半のことであった。従って、作品の重要な思想を成す民衆論も作者においてその時代に形成されたと考えることができる訳である。ドストエフスキーの大地主義は60年代のものとする俗説がいかに皮相的なものであるかが、こうした考察から明るみに出よう。

のみならず、『作家の日記』、とりわけその1876年2月号所収の短編小説「百姓マレイ」はドストエフスキーの大地主義をその生涯の最も早い時期である少年時代のものとすることを可能にする。この短編が「民衆に対する愛について。民衆との提携は必要である」と題する節の次の節に配されているのは偶然でない。ドストエフスキーにとって「百姓

マレイ」の同名の主人公はロシアの民衆の象徴であり、短編そのものは大地主義の象徴である。

そして「百姓マレイ」はドストエフスキー自身の揺籃の野辺であるダロヴォエ村なしに考えられない。短編（「逸話」、「思い出」という呼称もある）そのものも、その主人公（より正確には主人公マレイの原型）もダロヴォエなしには考えられない。

「もちろん、子供を励ますくらいのは誰しもする。しかし、この淋しい原中の邂逅の中には、何かしらまったく趣の違ったところがあった。もし私が彼の本当の子だったとしても、あれ以上晴やかな愛に輝く目つきで、私を眺めることはできなかったであろう。それなら、誰か彼にそれを強いるものがあったか。彼はうちの農奴となっている百姓だから、私はなんと言っても、彼のために坊っちゃんであった。けれど、彼が私をいたわったことなど誰も知る筈がないから、それに対して別に報酬が得られる訳でもない。それなら、彼は並外れて子供好きだったのか。そういう人間もよくあるものだ。

それは淋しい、がらんとした原中の邂逅であった。従って、当時まだ自分の自由のことなどはまるで夢にも思い設けていなかった、獣のように無知で粗野なロシアの農奴が、どれくらい進化した人間らしい深い感情と、どれくらいこまやかな、ほとんど女のような優しさに胸を充たしていたかは、おそらく神のみが高い所から見そなわすばかりであろう。読者よ、コンスタンチン・アクサーコフがロシア農民の高い教養と言ったのは、この点を意味したのではなからうか。」⁽⁸⁾

ここにおいてこそ「旦那」と「農奴」の間の隔たりが克服され、貴族と農奴へのロシア人の階級的分化が克服されている。ここでこそ社会の「上流階層」と「民衆（ポーチヴァ）」の間の障壁が除去されている。ドストエフスキーの大地主義はまさにこの自身の少年時代の体験のお陰で基礎づけられてい、説得力をもつのである。そしてダロヴォエなしにドストエフスキーの少年時代のこの貴重な体験はあり得なかったと思われる。

「百姓マレイ」には長めの前文と短い後記がある。前文には、この物語はドストエフスキー自身がシベリアの懲役の獄舎で見た夢の追憶であること、そして夢の内容である物語そのものは作者自身が少年時代にした体験であることが記されている。後記には、『作家の日記』の筆者が自ら懲役の身であった時に、この夢によって覚醒し、忽然として囚人仲間の民衆に対する憎悪や毒念が消え、以後は、少年の自分が百姓マレイに抱いたような思いで民衆出の囚人に接するようになったことが綴られている。幼き日のダロヴォエでの体験はドストエフスキーの生涯の世界観・人生観に決定的な意味をもった訳である。小品ながら「百姓マレイ」がその事情を見事に伝える珠玉の名品と目される所以である。

「ポーチヴァ」の概念は都市より田舎と結びついている。大地主義者ドストエフスキーにとって、モスクワに住んでいた幼少期に毎年の夏にダロヴォエに惹かれ、ペテルブルグに住んでいた老年期にもスターラヤ・ルッサで毎年の夏を過したことは象徴的である。このことは、ロシアの二つの首都に住んだドストエフスキーにとって「ポーチヴァ」が不可欠だったことを証している。ダロヴォエはロシアの古都モスクワ圏の村であり、スターラヤ・ルッサはドストエフスキーの時代の首都ペテルブルグ圏の地方都市である。ダロヴォエとスターラヤ・ルッサ　この二つの土地は大地の意味の「ポーチヴァ」に富み、二つの土地では、プーシキンの詩句に倣えば、ロシアの「ポーチヴァ」の匂いがし、古きロシアである「ルーシ」の匂いがする。プーシキンの物語詩『ルスランとリュドミーラ』の「献詩」に読む。

「そこには不思議なことがある　森の精が徘徊し、
水の精ルサルカが枝に座る。
そこには知られざる小道の上に
奇々怪々の獣たちの足跡がある。(中略)
けちん坊のカシチュイ王が金(きん)の山でやつれている。
そこにはロシアの精神がある...ロシアのにおいがする！」

そして第一歌の冒頭。

「遠く過ぎ去った日々の出来事、
はるかな古き昔の言い伝え。」⁽⁹⁾

ドストエフスキーは死の前年の1880年、モスクワで開催されたプーシキン像の除幕式でプーシキンについての講演をした。19世紀ロシアのまさに「世紀の論争」であったスラブ派と西欧派の論争に終止符を打ったと言われた「事件」と呼ばれたこの名講演は、言わば作家の「白鳥の歌」となったものであるが、それがプーシキンについてのものであったことは偶然でなからう。そしてその場所が当時の帝政ロシアの首都ペテルブルグでなくて、ロシアの古来の、かつ永遠の首都モスクワであったことも。

この「プーシキンについての演説」に触れてG・ポノマリョーフが著書の終章に「モスクワの申し子ドストエフスキー」を配しているのは興味深い。結語に次のように読む。

「そしてモスクワは、プーシキンについてのドストエフスキーの講演がそう呼ばれたように、「事件」の場所になった。作家はプーシキンの中に「完璧な」国民的表現を見て取ったのであり、この事件となった講演を貫くロシアの理念は西欧派とスラブ派の党派的不和を克服したものと受け取られたのであった。モスクワがロシアの本質的な存在意義を最高度に担うものであるということはドストエフスキーにとって生を終えるまで明

らかであった。」⁽¹⁰⁾

普通ドストエフスキーはペテルブルグの作家と見なされる。青春を帝国の首都で送り、その工兵学校に学び、そこでロシア文学史の永遠の語り草となった文壇デヴューをし、『貧しき人々』に始まるペテルブルグ物の初期作品を書き、そこでペトラシエフスキー事件に連座して逮捕され処刑劇に直面し、その結果10年に及ぶシベリア流刑に処せられ、帰還した60年代にやはりペテルブルグ物の中期作品を書いた作家、そして何よりもその69年代後半に、主題も主人公もペテルブルグであると言われることさえある『罪と罰』を書いた作家が大抵ペテルブルグの作家と見なされるのは無理もない。ロシアで刊行された「ドストエフスキーとペテルブルグ」をテーマにした著書、論文、エッセイその他は多くを数える。

日本でも後藤明生の『ドストエフスキーのペテルブルグ』が「都市のジャーナリズム」叢書に入って1987年に出版され、初期作品と『罪と罰』が「都市小説」として論じられている。これが新機軸のドストエフスキー論として日本の研究史に残ることは疑いない。だがそこには「都市小説」の定義がなく、その用語はごく常識的に使われている。なるほどペテルブルグという「フィクションとしての都市」を舞台にした「フィクションのフィクション」としての「都市小説」という着眼は、ロシア文学に通じた作家の新見解として広湖に喝采を博するものではあろう。

だが『罪と罰』はもちろん、『貧しき人々』、『分身』、『白夜』等のペテルブルグ物の初期作品といえども、作者自身の言う「世界一幻想的な」都市ペテルブルグに失われた古来の祖国ロシア、本来の祖国ロシアそしてそれ故の悲哀、そこに生まれる悲劇それこそが作品のモチーフであること、それこそがこの作家の本領であることを思う時、この本の「都市小説」という立場にどれだけの説得力があるだろうか、甚だ疑問である。のみならず、ある意味で『罪と罰』はいわゆるドストエフスキー文学の出発点に過ぎない。それは『白痴』、『悪霊』、『未成年』、そして未完の最終作『カラマーゾフの兄弟』と続く五大長編の第一作である。これらの大作を含めて「都市小説」と呼ぶことが果たして可能であるかどうか、浅学な本稿の筆者は大いに躊躇せざるを得ない。

「幻想都市」ペテルブルグに失われたもの、その都市を首都に戴く祖国ロシアに失われたもの ドストエフスキー文学の一貫したテーマはその探求にある。このテーマは作家の初期、中期、後期を問わない。20世紀世界文学の名作であるブルーストの『失われた時を求めて』に因めば、そのテーマは「失われた祖国ロシアを求めて」となる。

だがドストエフスキーにとって、求める「失われた祖国ロシア」は祖国の過去にも現在にもなかった。同時代の対立する既存の二大思潮である西欧派にもスラブ派にも作家

が与せず、第三の思潮と言われた大地主義の立場を自ら築いたのはそのためである。

自身の「白鳥の歌」となった「プーシキンについての演説」の中で、作家は詩人の代表作『エヴゲーニー・オネーギン』のヒーローとヒロインを比較対照して次のように述べる。そこには「ポーチヴァ」の語（傍点）が見える。

「彼は幻想を愛しているのだ。が、彼自身も幻想なのである。まったく、もし彼女が彼に従って行ったならば、彼は明日にも幻滅を感じて、自分の一時の熱中を冷笑の目で見ただろう。彼にはなんの地盤もない、これは風に漂う草の葉なのである。

ところが、彼女はまるで違う。絶望の中にあっても、自分の生涯は滅びたという悩ましい意識の中にも、彼女にはなんと言っても、魂の寄り掛かる強固な揺ぎなきなものがある。それは彼女の少女時代の追憶である。彼女の慎ましい清らかな生活の始まった、淋しい田舎にある故郷の思い出である。それは「彼女の哀れな乳母の墓の上なる十字架と、木立の陰」である。ああ、これらの思い出と、昔の様々な人の姿は、今や彼女にとっては何よりも尊いものであり、彼女に残された唯一のものであるが、これが彼女の魂をどんづまりの絶望から救っているのである。これは決して些少なことはない。否、そこには多くのものが含まれている。なぜなら、それは完全な土台であり、一種ゆるぎのない、破壊しがたいなものなのである。そこには故郷、郷土の民衆、その聖物との接触がある。」⁽¹¹⁾

ここにはドストエフスキーの大地主義が歴然と現われているが、それは「淋しい田舎」、「完全な土台」、「故郷」、「郷土の民衆」などの語彙によってはっきり感じられる、地盤（ポーチヴァ）の語は言うまでもなく。

ついでながら、モスクワっ子プーシキンとモスクワっ子ドストエフスキーの間には両者の少年時代に関して一つの共通点があることは興味深い。あるプーシキンゆかりの地の案内書には次のように書かれている。

「詩小説『エヴゲーニー・オネーギン』の一草稿には次のような文が残っている。

追放、哀傷、別離の身にあって、
モスクワよ！私はどんなにそなたを愛していることが、
聖なる我が故郷よ！

プーシキンにおいては一番最初の、最も生き生きして鮮明な“生活の印象”がモスクワと結びついていたのである。」⁽¹²⁾

すなわち、ロシアの天才詩人プーシキンと天才作家ドストエフスキーの人生の歩みにはいずれも、聖書のヨハネによる福音書の冒頭を思わせる「初めにモスクワありき、モスクワは故郷なりき」の趣がある訳である。

自身の「白鳥の歌」になったプーシキンについての演説にはドストエフスキーの大地主義の精神が漲っている。1880年8月号の『作家の日記』の第2章、にはその演説原稿が、それに先立って第1章には「後掲『プーシキンに関する演説』についての釈明」が掲載されている。第3章(全4節)にはこの演説にたいするグラドフスキーの攻撃に対する答弁が掲載されている。大地主義の立場からするドストエフスキーの民衆論、祖国ロシア論は死の前年の演説と時事評論の活動において一段と説得力を増している観さえ呈している。大地主義が作家生涯の不動の根本思想であったことは疑いを容れない。この時期の『作家の日記』(1876年、77年、80年、81年[遺稿])と年代的に最寄りの「作家の小説」である『未成年』(1875年)と『カラマーゾフの兄弟』(1878~80年)においても、五大長編の前3作である『罪と罰』、『白痴』そして『悪霊』と比べて大地主義は顕著さを増していると言える。それに反比例するように、五大長編においては「都市小説」の要素が年代を追って稀薄になっている。最終作『カラマーゾフの兄弟』においては主要舞台の一つは修道院である。(原型はモスクワ圏のオープンチナ修道院)概して修道院は都市を避けてとは言わずとも、少なくとも都心を避けた所、都市の郊外や周辺にあり、多く人里離れた場所を選び、深山幽谷にひっそり構えを持つことも稀でない。それは都市よりも大地と、自然と調和する。修道院を重要な舞台とする小説が「都市小説」の呼称に堪えるか否かは論を俟つまい。

ドストエフスキーの大地主義が終生のものであることに関する議論は以上でほぼ尽されたが(幼少期を除いて)、このテーマによる数少ない論文の一つであるV・トゥニマーノフのそれに目を向けてみよう。

「多くのことが1860年代のドストエフスキーとA・グリゴリエフの作品を結びつけていることはまったく当然のことである。主としてまさに彼らの努力によって、我々が「大地主義」という用語で意味するものが作り出されたのであり、それによって我々は、芸術家かつ時事評論家としての後年のドストエフスキーの中に模様替えした態様で保持された、美学的、哲学的、政治的、心理的要素の単一の複合体を擁する、一定の中間的な社会的・文学的傾向を理解するのである。」⁽¹³⁾

これは1960年代に形成されて70年代(当然、80年を含む)に持続したドストエフスキー等の主義・主張としての大地主義という見方で、ソ連時代が終わるまでの100年余りの研究史の「通説」の域を出ていない。通説に括弧がつくのは、そもそもドストエフスキーの大地主義の形成ないし生成を取り上げた研究などなきに等しいからである。作家の大地主義は後半生のものであって、それを前半生に繋ぐものは何もない。この「通説」のままソ連は崩壊し、20世紀にも幕が下りたのであった。

だがドストエフスキーの大地主義の萌芽はその前半生、というより幼少期にある。作家揺籃の野辺ダロヴォエに初めて光が当てられた『ドストエフスキーの7つの博物館』という小冊子の発行が2000年であることは、このテーマ「作家の前半生と大地主義」が21世紀の夜明けと共に浮かび出たばかりの、真新しいテーマであることを物語っている。そこに読む。

「自然への愛、大地（ポーチヴァ）、土、生きとし生けるものの感触が子供のドストエフスキーの心に非常に強く刻み込まれたので、13年後、（ペテルブルグのペテロ・パウロ要塞の牢屋に幽閉されていた時、彼は夏の田舎の自然のたたずまいを記憶の中で蘇らせた。ペトロ・パウロ要塞では自然も牢獄風のものであった。『…僕はまた庭を散歩することを許されましたが、そこには17本ほどの木が植わっていました。そしてこれが僕にとっては無上の幸福だったのです...』」⁽¹⁴⁾

ここに引用された「夏の田舎の自然のたたずまい」こそはダロヴォエの野のそれに他ならない。

「三つ子の魂、百まで」と言う。自身の死去の文字通り「その前夜」に、その折りに「事件」とまで呼ばれた「プーシキンに関する演説」で言い表わされた、ドストエフスキーのしんじつ大地主義的な思想は、まだ揺籃の幼少期に、モスクワ圏は古都ザライスク郊外の両親の領地ダロヴォエで初めて培われたものだったのである。

注釈 *印のある番号はロシア語文献を示す。

(1) 糸川紘一「白夜行・プラス・『白夜』考」『えうみ・ロシアの文学・思想』北海道大学文学部ロシア文学研究室内、えうみ編集部編、響文社発行、第18号、1990年、90～101頁。

(2) 糸川紘一「『作家の日記』と作家の小説『罪と罰』と『白痴』をめぐる」『えうみ』、第22号、1991年、56～63頁。

(3) ドストエフスキイ全集、全20巻・別巻1巻、米川正夫訳、河出書房新社、昭和45年。第4巻、『死の家の記録』、249頁。

以下、ドストエフスキーの引用はこの版による。

(4) 同、第20巻、論文・記録（下）、昭和46年。「大地主義宣言」、170～171頁。

* (5) 百科事典、全2巻、モスクワ、「ソビエチ百科事典」出版所、1964年、第2巻、240頁。

(6) ドストエフスキイ全集、第20巻、論文・記録（下）、昭和46年。「理論家の二つの陣営」、29頁。

- * (7) V・キルポーチン60年代のドストエフスキー
モスクワ、「文学」出版所、1966年、394頁。
- (8) ドストエフスキー全集、第14巻、作家の日記(上) 昭和45年。
1876年、2月、第1章、3「百姓マレイ」、224頁。
- (9) プーシキン『ルスランとリュドミーラ』、川端香男里訳、
プーシキン全集、全6巻、河出書房新社、第1巻、昭和48年、348~351頁。
- * (10) G・ポノマリョーフ『ドストエフスキー。「私はこの謎の解明に従事していま
す」』、モスクワ、「アカデミー図書」、2001年、301頁。
- (11) ドストエフスキー全集、第15巻、作家の日記(下) 昭和45年。
1880年、8月、第2章、「プーシキン論」、422頁。
- * (12) N・タルホワ著、科学アカデミー会員D・リハチョフによる序文。
プーシキンゆかりの地(案内書) 全2部。第1部、モスクワとモスクワ近郊ほ
か。モスクワ、「プロフィズダト」出版所、1988年、14頁。
- * (13) V・トゥニマーノフ「ドストエフスキーの書簡と『作家の日記』に見るA・グ
リゴーリエフ」 『ドストエフスキー。資料と研究』、第7巻、レニングラー
ド、「ナウカ」出版所、1987年、46頁。
- * (14) ドストエフスキーの七つの博物館、サンクト・ペテルブルグ、2000年、7頁。

3 [コロムナ教育大学主催シンポジウムを踏まえた総括論文]

ドストエフスキー・大地主義の生成

ダロヴォエとシベリア流刑

大地主義はロシアの19世紀60年代の社会思潮と言われる。だがドストエフスキーの大地主義に関する限り、それは決してこの10年間に限定できない。しかも大地主義と言えばドストエフスキーを指して筆頭に出る者はいない。大地主義はドストエフスキー兄弟が主宰した1860年代の雑誌『時代』と『世紀』をその場所とした思潮だが、それは70年代のドストエフスキーの個人雑誌『作家の日記』にも根強くその場所を見出している。またそれはこれらの雑誌だけでなく、60年代以降のドストエフスキーの幾つかの小説にもちりばめられている。こうしたことは、大地主義が作家の円熟期の創作を一貫して生きていたことを意味する。そしてここに、大地主義はドストエフスキーの生涯に亘って絶えず生成していたのではないか、という仮説が生まれる。

作家の生活と作品がモスクワ ペテルブルグ モスクワという軌跡を描いたことも、この仮説を後押しする。19世紀ロシアの一大テーマであった「ロシアとヨーロッパ」は「大地と都市」のテーマに通じる。言うまでもなく、「大地」はモスクワと、「都市」はペテルブルグとより強く結びつく。ドストエフスキーは「ペテルブルグの作家」と見られ勝ちだが、それは多分に一面的、かつ表面的な見方である。「モスクワの作家」ドストエフスキーも見なくては、この作家の全体像も本質も見えない。このことは作家の「白鳥の歌」である、モスクワのプーシキン像の除幕式における世紀の大演説からも言える。では、作家の生い立ちにおいてはどうだったか。ドストエフスキー揺籃の野辺ダロヴォエはこの問いにとって欠かせない。

ドストエフスキーが「都市作家」であり、その文学が「都市小説」であるとする見方は一面的であり、皮相的であると言わなければならない。なるほど、ドストエフスキーと言えばペテルブルグの作家であり、その町を（主な）舞台とする『罪と罰』が代表作である、というのが通念である。だが『罪と罰』にシベリアを舞台とするエピローグがあることを、「都市小説」論者はどう説明するのか。

S・ペローフの『「罪と罰」注解』（後出、注**）の文献目録には「『罪と罰』におけるペテルブルグ」の小わけがあり、そこには14点の著書・論文が出ている。1990年にこの本を翻訳出版した本稿の筆者は上梓に至る10年余りの間に、その14点を含む300点ほどのロシア語文献（一部、欧米の文献）を入手し、読破あるいは参照した。14点はN・アンツィフェーロフ『ドストエフスキーのペテルブルグ』（1923年、著書）、L・グロスマ

ン「都市と人間」(1935年、ある版の『罪と罰』の解説論文)他である。『注解』にこの小わけがあり、そこに14もの文献があること自体、『罪と罰』とペテルブルグ、『罪と罰』と都市」というテーマがこの小説にとって本質的なテーマであることを示している。

後藤明生『ドストエフスキーのペテルブルグ』(三省堂、1987年)はずばりこのテーマによる日本人の本である。「都市のジャーナリズム」叢書に収まったこの本は『罪と罰』をはずばり「都市小説」としているが、この規定(あるいは限定、断定)の妥当性は自明でない。この本の考察の対象は処女作『貧しき人々』から『罪と罰』までだが、ゴーゴリの「ペテルブルグ物」を継承したドストエフスキーの初期作品は多分に「都市小説」の呼称に相応しいとは言えよう。だが『罪と罰』もそうかと言えば、俄かに賛同できない。この小説に始まるドストエフスキーの五大長編は総じて「都市小説」の規定に包摂され得ず、『罪と罰』よりは『白痴』、『白痴』よりは『悪霊』と、後の作品ほどその度合は強まる傾向にある。絶筆『カラマーゾフの兄弟』を指して「都市小説」と言えるかどうかを思えば、この議論の黒白は明らかであろう。その意味で、この本が次のような結語で終わっているのは首肯されよう。

「ペテルブルグが、ピョートル大帝の『ヨーロッパよりもヨーロッパ的』という、まことに分裂=混血的イデオロギーによって出現したフィクションであることは、最初に書いた。とすれば、ペテルブルグ小説そのものが、そもそも『フィクションのフィクション』ということになるだろう。そしてそれが、私の考える『都市小説』でもある。

その意味では、この『ドストエフスキーのペテルブルグ』を、私は『罪と罰』から書き始めるべきだったかも知れない。しかし、『地下生活者の手記』においても、『罪と罰』にいても、その結末で作者自身が言っているように、ドストエフスキー小説の世界は、常に『終りは新しい始まり』であって、入り口は出口なのである。」⁽¹⁾

ドストエフスキー文学の全体像に対していかなる呼称や規定が可能かは至難の課題であり、一世紀半に亘る研究史はその全体が答えの試みであるとさえ言えよう。本稿もその試みの一つに過ぎないことは言うまでもない。

さて、モスクワが大地であると言えば、それだけでは確かに暴論であろう。二大政党ならぬ二大都市、ロシアの二都の一方であるモスクワを指して、田舎、地方を連想させる大地がそぐわないのはご尤もである。だがここは飽くまでも比較対照の文脈であり、ペテルブルグを念頭に措いた相対論の場である。

「土着と飛躍」という言葉で考えると、大地としてのモスクワと都市としてのペテルブルグはどちらもその特質を現わす。モスクワには土着と大地の語がいつかわしく、ペテルブルグには飛躍と都市の語がふさわしい。

1861年の『時代』に掲載された『ペテルブルグの夢 詩と散文 』には恰も「飛躍」そのんもかのような、都市ペテルブルグ観が書かれている。

「私はこんなふうに考える。もし私が偶然の雑録家でなくて、ほんものの職業的なそれであったら、私はウージェニ・シューになり変わって、ペテルブルグの秘密を書こうとするだろう、という気がする。私はとても秘密が好きなのだ。私は空想家で、神秘家で、正直に申し上げるが、どういうわけかペテルブルグという街が、いつも私にとって、何か秘密のような気がしてならなかったのである。まだ少年時代から、私はペテルブルグにほうり出され、迷子のようになっていたので、いつもなんとなしにこの街を恐れていた。(…)で、新しい建物が古い建物の上に立ち重なり、新しい市街が空中に築かれて行くかと思われた…で、結局、この世界ぜんたいが、そこに住む人々と、その住みかすべてを引っ括めて、弱者も強者も、貧者のあばらやも、金殿玉楼も、このたそがれ時には、魔法めいたファンタスティックな夢に似てくるのであった。その夢もやはり順番が来ると、たちまち消え失せて、まるで湯気のように、暗青色の空に蒸発してしまうだろう。」⁽²⁾

この後ドストエフスキーはこの「ネヴァ河畔の感触」を「幻想」と名づけるが、ここで「空中に築かれて」、「空に蒸発してしまう」に着目すれば、「飛躍」と結びついた「都市」ペテルブルグの姿が浮かび上がる。もちろん、ここには作家の「幻想」が書かれているのだが、ペテルブルグ自体の「幻想」性なしには作家の「幻想」もない筈である。なぜなら、「幻想」こそ最深の「現実」である、というのがドストエフスキーの芸術的信条、信念だからである。

この「幻想」、すなわち「ネヴァ河畔の感触」は『罪と罰』にも出て来る。

「彼は二十コペイカ銀貨を手のひらに握りしめて、十歩ばかり歩いてから、宮殿の見えるネヴァ河の流れへ顔を向けた。空には一片の雲もなく、水は殆どコバルト色をしていた。それはネヴァ河としては珍しいことだった。寺院のドーム（丸屋根）はこの橋の上から眺めるほど、すなわち礼拝堂まで二十歩ばかり隔てた辺から眺めるほど、鮮かな輪郭を見せる所はない。それが今、燦爛たる輝きを放ちながら、澄んだ空気を透かして、その装飾の一つ一つまではっきりと見せていた。(…)どこか深いこの水底に、彼の足元に、こうした過去いっさいが 以前の思想も、以前の問題も、以前のテーマも、以前の印象も、目の前にあるパノラマ全体も、彼自身も、何もかもが見え隠れに現れたように感じられた…。彼は自分がどこか遠い所へ飛んで行って、凡百のものがみるみる内に消えて行くような気がした…。」⁽³⁾

『罪と罰』に描かれた、この空中に雲散霧消する趣のペテルブルグ、すなわちネヴァ

河畔の「パノラマ」はドストエフスキーのロシア史観に由来する。

『「罪と罰」注解』に読む。

「[それにこの町！いったいどうしてこんなもの、我がロシアにできたんでしょうな！...]

ペテルブルグに対するドストエフスキーの変わらない態度 「世界中で最もわざとらしい都市」としての、そして「こしらえものの」、「世界中で最も幻想的な」都市としてのペテルブルグ は、この作家がペテルブルグをピョートル一世の「生みの子」とみなしていたことにもとづく。ドストエフスキーの考えによれば、ペテルブルグは民衆と知識階級との溝を一層深めたのであった。『未成年』のアルカージ・ドルゴルキーはペテルブルグの朝を「世界中で最も幻想的な朝」だと言うが、彼の物思いと比較されたし。

「こんなふうはじめじめした、湿っぽい、霧深いペテルブルグの朝にこそ、プーシキンの『スペードの女王』のゲルマン某の奇怪な夢がますます強まるに違いないと私は思う。(ゲルマンは巨大な人物で、完全にペテルブルグ人の典型 ペテルブルグ時代の一典型である!)私は幾度となくこの霧のさ中で奇怪な、執拗な夢想に耽ったのであった。『この霧が飛び散って、空の彼方に消え去る時、霧と共にこのじめじめした、すべっこい都会も丸ごと、霧に包まれて上空へ舞い上がるのではなからうか?そして残るものと言えば、元のままのフィンランド湾の沼沢地と、その中心に、お飾りに、へとへとに疲れてほてった息を吐く馬に跨った...青銅の騎士だけとなるのではなからうか。』」⁽⁴⁾

この世界観はドストエフスキーに一貫したもので、円熟期の小説や評論だけでなく、最も初期の作品にも現われている。ペトラシェフスキー事件に連座して10年間のシベリア流刑に処される直前の1848年に書かれた『弱い心』に既にこの世界観が出ていることを、同じ『「罪と罰」注解』が指摘する。「ベームは、ラスコーリニコフが眺めている風景はドストエフスキーが1848年に書いた短編小説『弱い心』のアルカージに深い感動を与えたペテルブルグの風景と同じであることに注意を払った。(A・ベーム「ドストエフスキーの作品における他人の災厄」/『ドストエフスキー論。論文・資料集』、プラハ、1972年、所収。)

ラスコーリニコフが反逆に駆り立てられたのは他人の運命を思いやったからであり、他人の悲哀や不幸を見たからであった。『弱い心』の主人公アルカージ・イワーノヴィチと同じく、ラスコーリニコフの中でもやはりこの同じネヴァ河の河岸通りのパノラマを眺めている時に新しい人間が生まれることは特筆すべきである。(次を参照されたし。V・キルポーチン『ラスコーリニコフの幻滅と崩壊。「罪と罰」論』)⁽⁵⁾

ドストエフスキーのこの世界観は自国ロシアだけでなく、西欧近代文明そのものに向けられたものである。そのことは、『罪と罰』の3年前の1863年に書かれた『冬に記す夏の印象』の中のロンドンの情景と対比したF・エヴニンが指摘している。

「[けれども夜が明けて朝が来ると、傲慢で陰鬱なあの精神が再びこの巨大な都会をすっぽりと包むのである。]

ペテルブルグもまたその不気味な守護神をもつことが分かる。この守護神はロンドンの空に住む守護神と幾分か似通っている。」⁽⁶⁾

『冬に記す夏の印象』(別名『夏象冬記』)はその実『ロシアで記すヨーロッパの印象』(同様に換言すれば『欧象露記』)である。ここに「ロシアとヨーロッパ」のテーマが歴然としていることは題名を上記のように「意識」しただけでもよく分かる。ドストエフスキーの次の作品『地下室の手記』(1865年)は『罪と罰』のデッサンないしエチュードとしての位置づけが定着しているが、一つ前の『冬にしるす夏の印象』も優にその数に入るものである。

「脱亜入欧」宣言ならぬ、言わば「脱欧入露」宣言　それこそはドストエフスキーの大地主義宣言であった。ロシアへのみならず、その大地へ　西欧派でもない、スラヴ派でもない大地主義の宣言は新生ドストエフスキー(と兄ミハイルの)雑誌『時代』創刊の辞に高らかに響く。

「ピョートルに続いたすべての人は、ヨーロッパというものを知りヨーロッパの生活に合流したけれども、ヨーロッパ人にはなれなかった。かつていつかは我々自身、欧化主義に対して無能力であるといって、我と我が身を賣めたものである。が、今は別様に考えている。今となつては、自分たちがヨーロッパ人になれないこと、ヨーロッパが我々に縁のない、むしろ我々に正反対の国民的根元からつくりだした、今では古くさくなった西欧の生活様式の一つに、我と我が身を押し込めるのが不可能なことは、我々も承知している(この様式は、自分のものとは違う寸法で縫われた他人の服を着ることが、不可能な能登同様である)。ついに我々は次のことを確信した。我々も同様に別個の、最上級に独立独歩の国民であつて、我々の目的はおのれ自身の新しき形式、我々の大地(ポーチヴァ)から取られた、民族的精神、民族的根元から取られた、自分自身の肉身的形式を創造することである。我々は被征服者として、我が肉身の大地(ポーチヴァ)へ帰つたのではない。我々は自分の過去を否定はしない。我々はその合理性をも自覚するものである。」⁽⁷⁾

「大地主義宣言、は1861年に創刊された雑誌『時代』の「予約購読募集広告」として[その前夜]1860年9月に言わば「起草」された。1861年は作家ドストエフスキーの再

出発の年である。その前の丸々10年間(1849~1859年) 壮年期の作家はシベリア流刑にあり、オムスクで4年半の懲役とセミパラチンスクで5年の兵役に服した。最初は欧露に、次いで首都ペテルブルグに帰還した作家は、堰を切ったように作品を発表する。

この再出発は様々な点で注目される。『虐げられた人々』もこの1861年の発表であるが、作家の文壇デヴューが『貧しき人々』であったことと考え合わせると、デヴュー作と再デヴュー作の取合わせは妙と言わざるを得ない。題名からして、この二作は作家の出発と再出発の時点における顕著な共通点、類似点を示しているからである。

『死の家の記録』も1861年の発表であり、ドストエフスキーの再出発を記念する作品である。だがこの作品が作家の全作品の中で特異な存在であることは、この作家を言わば相手にしなかったトルストイが、1880年(ドストエフスキー死去の半年前、トルストイ52歳の年)にN・ストラホフへの手紙の中で、唯一この作品だけは高く評価したことでも了解される。

「私は相変わらず同じ仕事を続けています。無用ではないような気がします。先日、身体の調子が悪かった時に、『死の家の記録』を読みました。私は随分忘れたり、読み返したりしましたが、プーシキンをも含めて新しい文学すべての中でこれ以上の良書を知りません。

調子ではなくして、観点がすばらしい 誠実味があり、自然で、キリスト教的です。立派な、教訓的な書です。昨日は終日、久しく覚えたことのない愉悦を覚えました。ドストエフスキーにお会いになったら、私が彼を愛しているとおっしゃって下さい。」⁽⁸⁾

『虐げられた人々』の場合とは反対に、デヴュー作とこの再デヴュー作の関係は、作家の出発と再出発における相違点を示している訳である。

そして新しい雑誌『時代(ヴレーミヤ)』の創刊もこの1861年であり、5年後の『世紀(エポーハ)』と共にドストエフスキーのジャーナリズム方面での活動場裡を拓き、1870年代の『作家の日記』に道をつける。「大地主義宣言」が事実上この『時代』創刊の辞になっていることは、本稿の主題にとって見逃せない。まして、作家の小説と評論は大概において表裏一体であり、不二一如であることを思えば、「大地主義宣言」はドストエフスキー文学にとって極めて重要な宣言と見なされねばなるまい。

ではなぜ作家の再出発の時点で大地主義が宣言されたのか。大別して、二つの道筋が考えられる。流刑時代からのそれと、ダロヴォエからのそれである。第一の道筋では、大地主義に至るなんらかの機縁が流刑時代のドストエフスキーにあったかどうかの問題になる。

大地主義 [ポーチヴェンニーチェストヴォ] の基になるロシア語 [ポーチヴァ] には

「土壌、土地、土、基盤」等の他に、末端の転義として「民衆」の語義がある。⁽⁹⁾ 民衆がドストエフスキーのシベリア流刑（特に、懲役）にとっていかなる存在であったかと思えばそれは作家のこの時期の最大の問題の一つであった。それは「貴族と民衆」の問題、「旦那衆と百姓」の問題として、『死の家の記録』に通奏低音のように響き、多くの頁も占める。

「不安と憂悶は一日一日と募っていき、監獄はいやが上にも呪わしいものになった。私が貴族出であるというところから、最初数年のあいだ、仲間の囚人たちから受けていた憎しみは、もはや私にとって堪え難いほどになり、私の生活ぜんたいを毒したしまった。この最初の数年間、私は病気でもなんでもないので、よく病院に臥しに行ったが、それはただ監獄の中にいたくない、何ものをもってしても和らげることの出来ない一同の憎しみから逃避したい、というだけのことであった。『おまえさんたちは鉄の嘴で突っついて、俺たちをいじめやがったのだ！』と囚人たちは私たちにき言い言いした。で、私は監獄にやって来る庶民階級の連中をどんなに羨ましく思たか知れない！彼らは来るといきなり、一同と仲間同志になってしまうのであった。」⁽¹⁰⁾

「ところが、旦那衆、貴族となると、話が違ふ。貴族はどんなに公明正大で、善良で、聡明であるにもせよ、囚人一同が仲間ぜんたいで彼を憎み、軽蔑する。それが幾年も幾年も続くのだ。彼らは貴族を理解しない、何よりもいけないのは、彼を信用しないことである。貴族は、友達でもなければ、仲間でもないのだ。よしんば何年もかかって、ようやく侮辱を受けないところまで漕ぎつけたにせよ、やはり彼は内輪の人間ではなく、永久に自分の疎隔された孤独な状態を、悩ましいまでに意識しなければならない。この疎隔は時とすると、囚人たちの側になんの悪意もなく、ただ無意識に行なわれることがある。自分たちの仲間ではないという、ただそれだけのことなのである。自分に縁のない環境に生活するほど恐ろしいことは、またとあるまい。」⁽¹¹⁾

徒刑の年月の経過と共に、「記録」の筆者である貴族ゴリヤンチコフは変わって行く。第一部は導入の「死の家」を受けて、「最初の印象」が三章あり、続いて「最初のひと月」が2章あり、第10章が「キリスト降誕祭」、最終の第11章がその折の「芝居」といった構成なので、刑期の最初の一年の「記録」と読み取れる。そしてその最終章に「貴族と民衆」というテーマにとって画期的と言わねばならない記述がある。

「こうした即席の役者たちを見ていると、感嘆の念さえ抱かされる。そして、我がロシアにはどれほど多くの力と才能が滅びていくことが、時としては、自由を奪われた苦しい運命の中で、いたずらに滅びていくことかと、我ともなしに考えさせられてしまうのである！」⁽¹²⁾

ここには既に民衆賛美のモチーフが認められる。ゴリヤンチコフの刑期は十年間と記されているので、この記述は彼がその最初の一年間で満期までに体験する精神的変貌の方向を示している、と言える。大団円である第二部第10章「出獄」では、このモチーフは一段と強まっている。

「この壁の中でどんなに多くの青春が滅び去ったことが！こうなったら何もかも言ってしまわなければならない。実にこの人たちは並外れた人間ばかりだった。彼らはおそらく我が国の民衆ぜんたいの中で最も才能ゆたかな、最も力強い人々なのではあるまいか。しかし、その逞しい力がいたずらに滅びたのだ。変則に、不当に、二度と再び返ることなく滅びたのだ。が、それは誰の罪だろう！ 実際、誰の罪だろう？」⁽¹³⁾

ここに記された民衆の賛美は同時に民衆の発見であり、ひいては人間の発見であることが分かる。そしてこの記述はドストエフスキー自身がオムスクの要塞監獄を出獄した1854年に兄ミハイルに書いた手紙の文章と呼応する。「もっとも、人間はどこへ行っても人間であらう。懲役の中でさえ、僕も四年の間には、ついに人間を見分けるようになりました。兄さんは本当に出来ないかも知れませんが、その中でも深刻な、強い、立派な性格のものがいます。そして、粗野な表皮の下に黄金を発見するのは、なんと楽しいことでしょう。しかもそれが一人や二人でなく、幾人もいたのです。(…)なんとという素晴らしい人々でしょう。概して、あの年月は僕にとって失われたものではありません。たとえロシアそのものでないまでも、僕はロシアの民衆をよく知りました。おそらく、多くの人が知らないだろうと思われるほど、よく知ったのです。」⁽¹⁴⁾

ここに自らしたためたように、ドストエフスキーにとって流刑の十年は「失われた十年」でなく、「空白の十年」でなかった。ロシア帰還のあと程なく再開された文学活動の尋常一様でない豊穡さは、その十年がむしろ「豊穡の十年」だったことを物語っていよう。敢えて言えば、流刑の十年間にドストエフスキーの文学活動は中断しなかったどころか、むしろ進展し進化した。なぜなら、文学活動と執筆活動は必ずしも同義でないからである。円熟期の大作 五大長編小説も、作家の日記も は、そのモチーフの多くを流刑時代の体験と思索に負っている。『罪と罰』のエピローグがその好例である。ドストエフスキーの研究史上には『罪と罰』を前編とし、『死の家の記録』を後編と見なす「二部作」論もある。

『罪と罰』と「死の家の記録」の「二部作」論は19世紀の内に表明されている。最も早いのはN・ストラーホフの論文「ドストエフスキー『罪と罰』」であり、小説が執筆・発表(1865~66年)された翌年の1867年のことである。ストラーホフは大地主義の主要な推進者の一人で、1860年代前半のドストエフスキー兄弟の雑誌『時代』と『世紀』の

執筆陣を構成していた。ストラホフはドストエフスキーの死後ほどなく、『罪と罰』のスヴィドリガイロフや『悪霊』のスタヴローギンの少女凌辱は作家自身のそれであるという、文学における「事実と小説」の関係の極めて幼稚な自身の認識をさらけ出す愚行をしてまで盟友の作家に裏切り行為を取行し、いまだ傷心の癒えぬアンナ未亡人に手酷い打撃を与えた人物であるが、発表直後の『罪と罰』に寄せた論文では、爾来一世紀半における無数のドストエフスキー論の中で希少価値を失わない卓見を披瀝している。

「作者が遂行したのは課題と認識される二つの側面の内の一つだけである、と私たちが述べるとしたら、それは明白なことのなるであろう。実際、小説の主要な興味は奈辺に存するのか。犯罪が実行された瞬間から、読者は絶えず何を待っているのか。読者はラスコーリニコフにおける内面的な大転換を待ち、彼の中で真に人間的な感情と思想の覚醒を待っているのである。ラスコーリニコフが自分自身の中で殺したいと思った原理は彼の心の中で復活して、以前より大きな力で言葉を発しなければならない。

だが作者は、この作品そのものの中で着手するには、課題のこの側面が彼にとって余りにも大きくて困難であるというふうに事柄を設定したのである。ここにドストエフスキー氏の小説の短所があり、それと共に長所もあるのだ。彼はラスコーリニコフが自分の抽象性の中で非常に冷酷な人間になってしまったので、この墮落した心の厚生が容易には遂行され得ず、非常に高い様式の精神的な美と調和の出現をおそらく私たちにもたらずであろうという目標を立てたのである。」⁽¹⁵⁾

「二部作」の第二部が何であるかを最初に明確に打出したのはI・オルシャンスキーであり、その論文「ある思想的犯罪の物語。ドストエフスキーの『罪と罰』」がそれ自身も二部作（第一、第二論文）として『北方報知』に発表されたのは19世紀もやがて終わらんとする1896年のことであった。『死の家の記録』は作品の創作年代順からすれば『罪と罰』に5年ほど先立つ1861年であるが、オルシャンスキーは『死の家の記録』を「二部作」の第二部として、次のように書く。

「ロシア文学は犯罪人の生活が稀に見る芸術的真実を以て描かれ、犯罪事件が深い心理分析を加えられている二つの作品をもつ。読者は話題になっているものがドストエフスキーの『死の家の記録』と『罪と罰』のことだと洞察しよう。(…)『死の家の記録』と『罪と罰』は互いに他と数年を隔てているが、その内実において互いに有機的に補完し合う一つの総体なのである。」⁽¹⁶⁾

オルシャンスキーのこの見解はストラホフのそれを継承し発展させるものであり、両者の関係はロシア文学の研究史においても興味深い。尚、『罪と罰』論におけるオルシャンスキー論文の意義に関しては、つとに1990年に本稿の筆者糸川による考察が『え

うみ（ロシアの文学・思想）』第20号誌上の論文「『罪と罰』の夏と冬」(中)にある。⁽¹⁷⁾

知識人ラスコーリニコフは、彼の自覚の有無に関わらず、民衆の問題を避けて通れない。人間を凡人と非凡人に二分する彼の思想（ニーチェの「超人」に擬される）は人間を知識人と民衆に二分する思想を徹底させたものと考えることができる。そう考えれば、『罪と罰』は19世紀中葉のロシア（のみならず西欧）の時代精神をしかと見据えた問題提起の試みとして受止められよう。

さて『作家の日記』には民衆論（「民衆と上流社会」、「民衆と知識階級」など）が展開される頁が夥しいが、一読して非現実論とさえ思えるその論調も、『死の家の記録』やシベリア便りと読み合わせれば、もしかしてこれこそは現実論であり、究極の民衆論であるかも知れない、と読者に再読、三読を迫らずにいない。

民衆賛美は人民主義を想起させる。それは、ポーチヴァ「大地」がナロード「人民」の語義を持つからである。ナロードニチェストヴォ「人民主義」とポーチヴェンニチェストヴォ「大地主義」にはある意味で通じるものがある。だが両者は決定的に違い、全く似て非なるものである。それは主客転倒の相違である。人民主義においては、ロシア史に見るように、「主」は貴族や知識人であり、人民は「客」に過ぎない。「知識人が農民を教化する」というのがその定式である。これと正反対に、大地主義においては、上来『死の家の記録』に見たように、「主」は民衆であって、貴族や知識人は「客」に過ぎない。『作家の日記』には「民衆が貴族や知識人に学ぶのではなくて、逆に、貴族や知識人こそ民衆に学ばなくてはならない」という趣旨の断言がある。ロシア革命の思想であるマルクス・レーニン主義は前衛政党的の共産党が大衆であるプロレタリアを指導するという思想であるが、これは根本において人民主義の思想と同じである。知識階級VS無産階級という史的唯物論の図式は知識人VS農民という人民主義の図式と本質において同じである。人民主義（ナロードニキ運動）が19世紀を越えられず、社会主義ロシア（ソ連）が20世紀を越えられなかったことは両者の限界を象徴し、その誤謬性を暗示していよう。

第二の道筋では、大地主義の淵源は流刑時代をはるかに溯る。大地は民衆をも意味し、大地主義は民衆の発見と民衆の賛美でもあることを思えば、作家の大地主義の淵源はその少年時代に溯ると考えなければならない。

少年時代のドストエフスキーは父親が新規に入手した領地ダロヴォエで夏場を過す恩恵に浴した。それは1832年から38年（11歳から17歳）の数年間、ペテルブルグに移るまでの殆どの年、家族は様々な組合わせでその地で夏を送った。ダロヴォエは大地としての「ポーチヴァ」と「民衆」としての「ポーチヴァ」を併せ持つ、言わば少年にとっての理想郷であった。それを相続した弟アンドレイは後に、幼少時代のドストエフスキー

を知る上で貴重な文献となる『回想録』を著すが、そこにはダロヴォエが一家の子供たちにとってどんなに大きな恵みであったかが書かれている。

「村の中の私たちの土地はとても気持よくて、風光明媚な所であった。南ロシアの建築様式によって粘土でくっつけ、編んだ小枝で作った小さな離れは、私たちが来る時のために三つの小部屋を用意して、かなり大きな鬱蒼とした菩提樹の茂みの中にあった。この茂みは小さな野原を隔てて白樺の森に接していたが、その森はすごく密生していて、あちこちに谷のあるうす暗い荒地になっていた。この森はブルコヴォと呼ばれていた。上に述べた野原の反対側には5デシャチナ（1デシャチナは1ヘクタール強）ほどの大きな果樹園があった。その果樹園の入り口はやはり菩提樹の茂みの方から入るようになっていた。果樹園は深い壕でぐるりと取囲まれていて、その土手沿いにスグリの灌木がぎっしり植え込まれていた。果樹園のうしろ部分はやはりブルコヴォの白樺の森に接していた。（*この名称は兄フョードル・ミハイロヴィチの作品に幾度も出て来る。例えば、『悪霊』の中でスタヴローギンとガガーノフの決闘する場所がブルコヴォの名で呼ばれている。）この三つの土地 菩提樹の茂み、果樹園、ブルコヴォ は私たちがいつも滞在し散策する場所となっていた。（...）ブルコヴォの森は当初から非常にフェージャ兄さんの気に入ったので、後に私たちの家族の間でそれはフェージャの森と呼ばれた。」⁽¹⁸⁾

これは未来の作家が大地としての、自然としての「ポーチヴァ」をどう受止めたかを遺憾なく推察させる文章であり、作家の弟も文才に恵まれていたことを伝えている。

では民衆としての「ポーチヴァ」の方はどうだったろうか。ダロヴォエの民衆は未来の作家にどんな印象を与えたのだろうか。弟アンドレイの『回想録』はそれもよく伝えている。

「上述のように、村で私たちはいつでも戸外にいて、遊びの他に連日、朝から晩まで野外で過し、野良仕事の場所に居てそれを眺めていた。農夫たちはみんな、とりわけ農婦たちは私たちをととても好いてくれ、少しも遠慮せずに私たちの話に仲間入りするのだった。私たちの方も出来るだけの手立てを尽して、その人たちの役に立とうと努めた。例えば、ある時フェージャ兄さんは一人の農婦が予備の水をこぼしてしまったのを見て、

そのために農婦には子供に飲ませる水がなくなってしまった、すぐさま2露里（1露里は1キロ強）ほどの距離を家まで走って行き、水を運んで来たところ、そのことで哀れな農婦に深く感謝されることになった。そう、農民は私たちを好いてくれたのだ！」⁽¹⁹⁾

『作家の日記』は1876年に創刊されるが、開始して間もない2月号の第1章に「2. 民衆への愛について。民衆との欠かせない契約」の節と「3. 百姓マレイ」の節が置かれて

いる。この2節を読む者はダロヴォエのフェージャ少年を想起する筈である。

「民衆への愛について。…」には民衆へのドストエフスキーの愛が脈打っている。そこには次のように書かれている。

「しかし、それよりむしろロシア文学に目を転じよう。プーシキンの創造した恭順で淳朴なペールキンのタイプを初めとして、ロシア文学の中における真に美しいものは、すべて民衆の中から取られているではないか。ロシアではすべてがプーシキンを起源としている。彼の創作生活の中でも極めて初期に属するあの時代に、彼が忽然として視界を民衆のほうへ転じたということは、実に比類のない驚嘆に値すべき出来事であって、あの時代おしては思いもよらぬ、新しい言葉を発したものである。(…)現代の文学に現われた純国民的な諸々のタイプについては、今更くり返すのをやめにするが、ただオブローモフを思い出して頂きたい。ツルゲーネフの『貴族の巣』を想起して頂きたい。むしろこの中に出て来る人々は農民ではないけれど、ゴンチャロフ(『オブローモフ』)とツルゲーネフ(『貴族の巣』)の創り出したこれらのタイプの有している永遠な美しいものは、すべて民衆に触れたところから生れて来たのである。この民衆との接触が、彼らに並々ならぬ力を賦与したのである。彼らは民衆から単純と、謙抑と広い理解力と、毒念を解せぬ心とを借りたのである。」⁽²⁰⁾

そして「我々(すなわち、貴族・知識人)」と民衆の間の前述のいわゆる「主客関係」については、ずばりとした断言がなされる。

「私はこんなふうに考えている、我々は自分自身を民衆の理想として誇り、民衆に是非とも自分たちのようなものなれと要求し得るほど、そんなに立派な美しい人間であろうとは信じられぬ。どうかこの馬鹿馬鹿しい問題の立て方に、びっくりしないでもらいたい。しかし、ロシアではこの問題は、今までこういうふうにしかなかったのである。『我々と民衆とどちらが優れているのだろうか? いったい民衆が我々の範に従うべきものか、それとも、ことらが民衆の足跡を踏むべきだろうか?』今日、誰にもせよ、ほんのしづくほども頭に思想を有し、胸に共同の事業に関する憂慮の念を抱いているものは、みんな一様にこう言っているのではないか。そこで、私は心から次のように答える、我々こそ民衆の前に跪いて、思想も形式も、一切のものを彼らから期待しなければならぬ、民衆の真理の前に、跪拝しなければならぬ。」⁽²¹⁾

この民衆賛美は前述のように、作家が第一義的には4年半のオムスクの牢獄で到達した思想であるが、その到達にはダロヴォエの体験も少なからず寄与していたと考えねばなるまい。「三つ子の魂、百まで」と言う。子供心に受取ったダロヴォエの農民(民衆)のほのぼのとした愛が『作家の日記』の「民衆への愛について。…」の愛に繋がっていな

いなら、いずれの愛も所詮は空無に過ぎなくなる。

「1. 民衆への愛について。…」の次に「2. 百姓マレイ」が来ることは、後者の主題が上流社会の民衆への愛であることを物語る。本来は小説家である文人の時事評論雑誌『作家の日記』は「作家の小説」と密接に結びついている。その好例は『未成年』の場合であり、この小説の主要テーマである「偶然の家族」の問題は『作家の日記』の多くの章節を占め、『日記』は小説の最良の注解になっている。この「1. .]」と「2. .]」は同じ第1章の1節と2節であるため、その関係は明白である。「ペテルブルグ年代記 詩と散文」の命名法に倣えば、この二つは「上流社会と民衆 小説と評論」となる。

「1. .]」のテーマは上流社会の民衆への愛であり、「2. .]」のそれはその逆、すなわち民衆の上流社会への愛である。作家の原体験としては、弟アンドレイの『回想録』に読むように、「百姓マレイ」がフェージャ少年のダロヴォエでの体験だったことは、冒頭でそれが「遠い昔の思い出」であり「私はその時たった十歳くらいだった」と書かれていることから明らかである。このエピソードは作家の民衆観の言わば原風景である。

だが注目すべきは、全部で4頁のこの「逸話」の最初の1頁が、さながら『死の家の記録』の断章になっていることである。懲役囚の作家は復活祭の季節にふと物思いに沈み、しばし思い出に耽っている。幼時の一瞬が目には浮かび、(ダロヴォエ)村が絵巻物「百姓マレイ」の舞台になる。概して自然描写に乏しいとされる作家だが、この舞台の村の描写は珠玉のロシア自然誌と言える。そしてここに刻まれた、人間の鑑のような百姓マレイの人物像は10歳足らずの少年フェージャが既に「民衆を発見」し、「民衆を賛美」していたことを物語る。それは懲役における作家の「民衆の発見」及び「民衆の賛美」と本質的に変わらない。だからこそ、「百姓マレイ」は言わば『死の家の記録』の断章さながらなのであり、この「逸話」は作者の徒刑時代の思い出、すなわち『作家の日記』の時点からする「思い出の思い出」という体裁を成しているのである。ドストエフスキーの生活と作品を考える上で、これは見逃せない事実であると言わねばならない。

『作家の日記』所収の珠玉の小品「百姓マレイ」は「思い出の思い出」の体裁を取ることで、計らずも作家の民衆観の生成を明るみに出している。「人民主義」に似て非なるドストエフスキーの「大地主義」は1860年代の『時代』創の宣伝文句としての仮初の思いつきではない。それに先立つ10年間の流刑時代に「大地主義」は作家の不動の信念となった。だが「大地主義」は単なるシベリア土産ではなかった。ペトラシェフスキー事件に連座してシベリア送りの運命を招いたのは、思えば自身の「大地主義」、すなわち「民衆の発見」、「民衆の賛美」、「民衆への愛」ゆえだったと考えることが出来る。民

衆本位の「大地主義」なしには「金曜会」への作家もなかったであろう。「大地主義」ゆえに若き作家は民衆の真価が知られず、民衆が正当に扱われない祖国ロシアの地下結社に足を踏み入れたのだ。そしてその「大地主義」が少年時代のダロヴォエの野辺に端を発し、壮年期にシベリアの牢獄で形成され、円熟期の言わば演壇である自身の雑誌『時代』や『作家の日記』、そして幾つもの小説において開陳された。それを思う地平には、作家の生涯に亘る趣の、「大地主義」の遠大な生成の軌跡が浮び出よう。

注釈 *印のある番号はロシア語文献を示す。

- (1) 後藤明生 ドストエフスキーのペテルブルグ
三省堂、1987年、188頁。
- (2) ドストエフスキー全集 全20巻、別巻1巻。
米川正夫訳、河出書房新社、昭和45～47年。
第19巻、論文・記録(上) 312頁。
以下、ドストエフスキーからの引用はこの版による。
- (3) ドストエフスキー全集、第6巻、罪と罰、昭和47年、109～110頁。
- (4) ドストエフスキー全集、第11巻、未成年、昭和46年、143頁。
- (5) 『「罪と罰」注解』
S・ペローフ著、糸川紘一訳、群像社、1990年、174～175頁。
- * (6) F・エヴニン「小説『罪と罰』」 『ドストエフスキーの創作(論文集)』、モスクワ、ソ連科学アカデミー出版所、1959年、215～264頁。
- (7) ドストエフスキー全集、第20巻、論文・記録(下)、昭和46年、171～172頁。
(土地主義宣言)
- (8) トルストイ全集、全19巻、別巻1巻、河出書房新社。
第18巻、日記・書簡。中村融訳。書簡、N・ストララーホフ宛、1880年9月26日付。428～429頁。
- * (9) 百科事典、全2巻、モスクワ、「ソビエト百科事典」出版所、1964年、第2巻、240頁、「ポーチヴェンニーチェストヴォ」(大地主義)の項目。
- (10) ドストエフスキー全集、第4巻、死の家の記録、昭和45年、220頁(第二部5夏の季節)
- (11) 同、249頁(第二部7抗議)
- (12) 同、160頁(第一部11芝居)
- (13) 同、290頁(第二部10出獄)

- (14) ドストエフスキー全集、第16巻、書簡(上) 昭和45年、150~151頁。兄ミハイ
ル宛、1854年2月22日付。
- * (15) N・ストラーホフ「ドストエフスキー『罪と罰』 『オチェーチェストヴェ
ンヌイエ・ザピースキ(祖国の記録)』、1867年、第三号、第四号 / N・スト
ラーホフ『文芸評論』、サンクト・ペテルブルグ、「ロシアキリスト教人文学研
究所」出版社、1992年、59頁。
- * (16) I・オルシャンスキー「ある思想的犯罪の物語。ドストエフスキーの『罪と罰』」
『セーヴルヌイ・ヴェースニク(北方報知)』、1896年、第10号、第11号。
引用は第10号、15頁から。
- (17) 糸川紘一「『罪と罰』の夏と冬」(上)(中)(下) 『えうみ(ロシアの文
学・思想)』、北海道大学文学部ロシア文学研究室、えうみ編集部編、響文社発行、
第17号(1989年)、第18号(1990年)、第19号(1990年)。オルシャンスキー説に
ついての考察は第18号(中)。
- * (18) アンドレイ・ドストエフスキー(作家の弟)『回想録』
サンクト・ペテルブルグ、「アンドレイと子息たち」出版社、1992年、59頁。
- * (19) 同、62頁。
- (20) ドストエフスキー全集、第14巻、作家の日記(上) 昭和45年、216~217頁。
(21) 同、217~218頁。